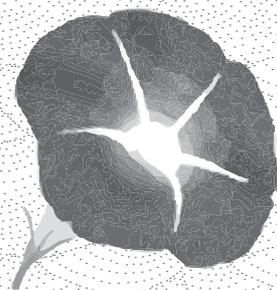
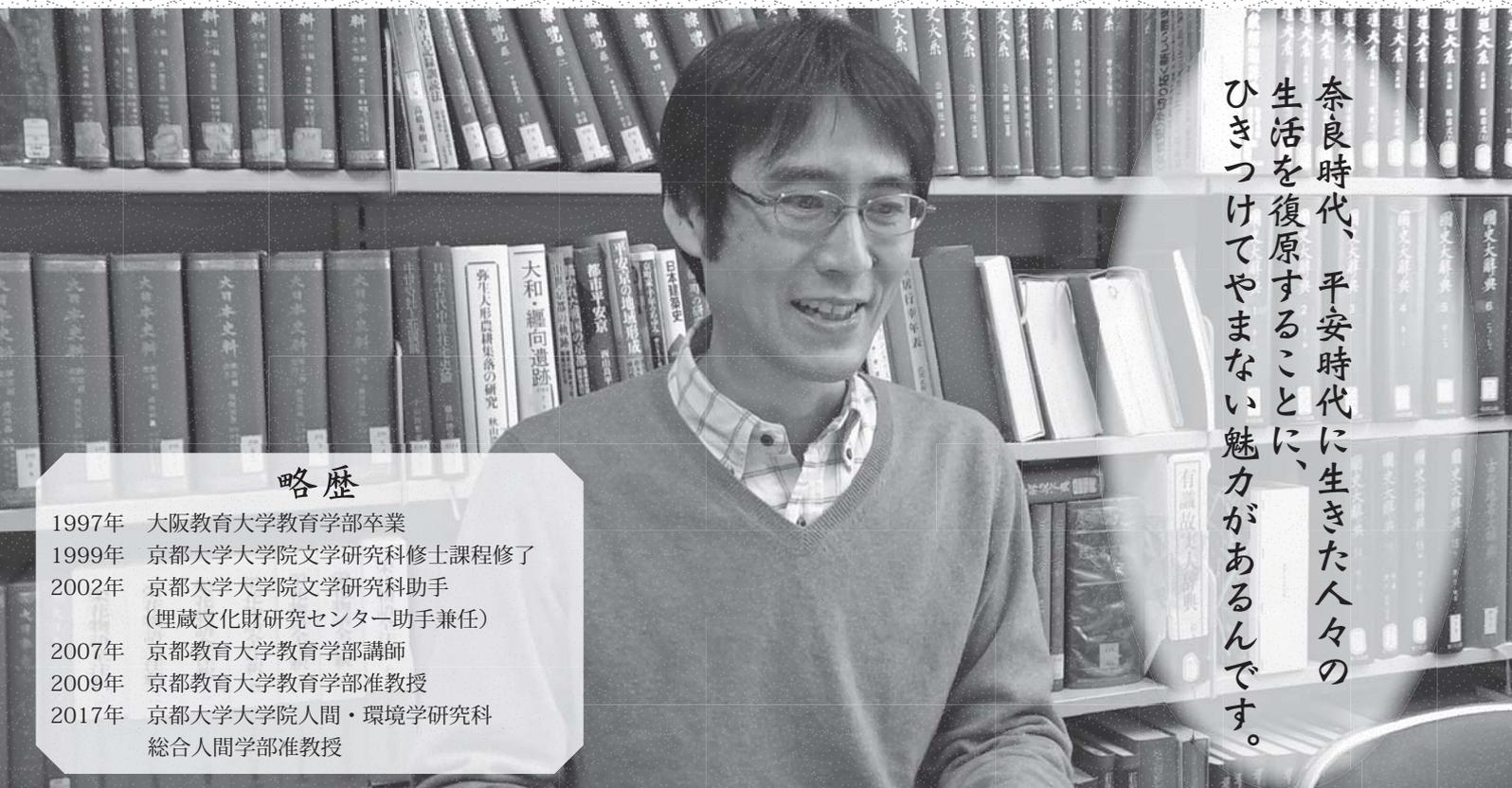


人間・環境学研究科 共生文明学専攻
歴史文化社会論講座



吉江 崇 准教授

吉江准教授は古代日本史を専門としている研究者です。教育学部を卒業した後、文学研究科に籍を移すという珍しい経歴をお持ちです。そんな吉江准教授にお話を伺いました。(日和)



奈良時代、平安時代に生きた人々の生活を復原することに、ひきつけてやまない魅力があるんです。

略歴

- 1997年 大阪教育大学教育学部卒業
- 1999年 京都大学大学院文学研究科修士課程修了
- 2002年 京都大学大学院文学研究科助手
(埋蔵文化財研究センター助手兼任)
- 2007年 京都教育大学教育学部講師
- 2009年 京都教育大学教育学部准教授
- 2017年 京都大学大学院人間・環境学研究科
総合人間学部准教授

はみだし
すてーじ

家庭教師やってみたいです。
⇒いろいろなバイトをされるといい経験になるらしいですよ！

(理・1 ゆうゆ)
(いろいろチャレンジしましょう！；編)

教員として

—どうして大学の教員になろうと思ったのですか？

吉江 崇准教授（以下、吉江）：「私自身は、もともと高校の先生になりたかったんですけども、当時、教員採用試験というのがなかなか受からない時代でしたし、それに大学の教育の授業でほとんど単位が取れなかったんです。私はその頃バイトばかりしていたので、出席重視の授業が多い教育の科目は、単位が認定されてもギリギリでした。勉強する時間もなかったので、途中から先生になることは無理だな、と思い始めました。でも専門の日本史の授業は好きだったので、大学院に入っても少し勉強しようと思って。そのまま続けていたら大学教員になってしまった、という感じですよ。

—大学教員をしていて良かったことは何かありますか？

吉江：中学校や高校の先生と一緒にあれこれながら、学生と話す機会が多いことです。私はほとんど年を取っていくんですけど、学生はずっと一定の年代なんですよね。やっぱり学生なので、夢があって希望があつて、さらに京大の学生に限って言えば、ある意味で「大学の先生なんて」って思ってるところもあります。そういうものに刺激を受けて、私もまだまだ学生の気分でいられるんです。そうして、学生の気持ちのまま、初志を忘れずに勉強が続けられるということがいいところだと思っています。

—逆に、大学教員をしていて苦労したことは何ですか？

吉江：そこまで苦労はしていません。ですが、人に教えるということはすごく苦手なので……。授業をする以上、教えなければいけないことがあると思うんですけども、それってというのが本当に自分の中にあるんだ

ろうか、という葛藤がいつもあります。授業を行う上でどのようなことを気をつけていますか？

吉江：自分が面白いと思ったことをどう伝えるかだと思っています。私が教える分野では、絶対教えなければいけないことというのがあまりないので、これから勉強したいという気になるものが伝えられらなと思いい、自分が面白いと思ったことを話しています。

研究者として

—研究者として、どのような研究を行っていますか？

吉江：日本の古代の天皇とか貴族社会がどのようなものかということを研究しています。具体的には、当時行われていたいろんな儀式や儀礼を分析することによって、貴族社会がどのような規範意識を持っていたのか、どういったルールを持っていたのかということ調べています。そして、貴族社会というのはどのような構造になっているのか、ということも研究しています。現代でも、教室だと前の方の席は空いているとか、後ろの方は聞こえにくいから座らないとかある種のルールがありますよね。それと同じような古代のルールを知ることによってこの儀式・儀礼というのはどんな意味合いのものなのかを知ったり、人物同士の関係を知ることによって貴族社会というものを知ったりしようと思っています。

—京大で研究されていると思いますが、京都で研究できるメリットはありますか？

吉江：自分は昔から古い時代が好きで、奈良時代とか平安時代とかに関心がありました。京都で研究していればその時代の資料はいっぱいあるし、フィールドもいっぱいある。奈良に行こうと思えばすぐ行けるし、京都のどこで政治が行われたかということ

も地理的によくわかります。そのように、京大にいるメリットはたくさんあります。埋蔵文化財研究センターではどのような活動をしていましたか？

吉江：京都ではどこでもそうなんですけど、京大というのは遺跡の中に建っているんですね。ですので、建物を建てかえたりするときに必ず発掘調査をしないといけない。その発掘調査をしている部署が、京大の埋蔵文化財研究センター（現・文化財総合研究センター）なんです。そこに私は五年勤めていたんですけど、発掘調査をしていた時はものすごく楽しくて、発掘をすると全然訳のわからないものが現れるんですけど、これは何だろうということから始まって、日々状況が変わっていく。地中から器が出てきたり、井戸が出てきたり、日々の発見がある。数百年埋められていたものに数百年ぶりに手を触れるのが私であること、そこに理屈では表せない楽しさがあります。

最後に

—京大生にメッセージをお願いします。

吉江：最近はおとどおとなしくなっているような気がします。もっと自分らしく、というか京大らしさをアピールして、ってほしいと思います。それと、他の先生に聞いても同じことを答えると思うんですけど、これから研究をしていくようなときには「わからないことがあった」というのが研究のスタートになると思うんですけども、それは「わからないこと」があつてこそ話なので、「わからないこと」をいっぱい見つけてほしいと思っています。いろんなところに行つて、わからないという経験をいっぱい積んでほしいです。

—ありがとうございました。